

17世紀ロシア古儀式派文献

『貴族夫人モロゾヴァの物語』の言語の研究

学位論文内容の要旨

本論文は序文、第1章～第6章、結文、参考文献、露文要旨、補遺1によって構成され、序文～参考文献は、A4横書き213頁、露文要旨は同7頁、補遺1は同36頁からなる。

本論文は17世紀古儀式派文献『貴族夫人モロゾヴァの物語』（以下『モロゾヴァ物語』と略す）の言語分析であり、現存する全写本に基づいて確定された三つの版のうち、最も成立年代の古い「詳細版」を対象としている。『モロゾヴァ物語』が成立した17世紀のロシアは、本来の文章語である教会スラヴ語と並んで、事務行政文書の官庁語や口語のロシア語が文章語としての機能を拡大し、言語的なカオスが生じ始めた時代であった。

この時代に生じた古儀式派文献に対するこれまでの言語学的研究は、当時の口語的要素をかなり含んだアヴァクムの著作が中心であった。一方『モロゾヴァ物語』は、西洋的な要素を取り込んで言語改革がなされた、当時主流のウクライナ教会スラヴ語を排し、言語的古形が保たれたロシア教会スラヴ語が一貫して使われていることに特徴があり、その学問的な校訂テキストの刊行も近年（1979年）のため、この作品の研究にはあまり手がないのが現状だが、この『モロゾヴァ物語』は、ロシア文化史・宗教史においても重要で、文学的価値も高いものである。本論文は、文献学的手法で、この特徴的な言語を総合的に把握しようとした労作であり、難解な『モロゾヴァ物語』をきわめて精緻に読み込み、綿密な分析を行っている。

第1章は『モロゾヴァ物語』の背景として、当該の問題に関する文献を渉猟しポイントをまとめた研究史概観であり、17世紀中葉のニコンの教会改革と典礼書改訂、それに対立する中で成立した古儀式派について、また両派の論争に現れた言語観の差異、古儀式派指導者達の執筆活動とそれらの文献の研究状況、モロゾヴァ夫人の生涯、文献解題として作品の成立史と現存の三つの版の相関関係、最後にこれまでの研究状況が述べられている。

この中では、典礼書の言語をラテン語に固定したローマ・カソリックと大きく異なり、スラヴ世界ではキリロスとメトディオスに始まる、ギリシャ語からスラヴ語への典礼書の翻訳の長い歴史と、その後のスラヴとビザンチンの複雑な歴史的・文化史的關係があり、またスラヴ・ロシアの世界では典礼書の改訂が、常にアクチュアルな言語学の問題を含ん

でいた点が指摘されていて、非常に興味深い。

第2章以下で『モロゾヴァ物語』の具体的な言語分析が行われるが、先ず第2章では音的側面から、スラヴ的要素（スラヴァニズム）とロシア的要素（ルシズム）の対立が扱われている。『モロゾヴァ物語』が成立した時代には、起源的にはスラヴァニズム形でもその歴史的過程で、文体的な価値が変質している語がかなりある。そこで本論文では、テキストに出現するこれらの語について、1.両形が使用される語彙、2.スラヴァニズム形のみが使用される語彙、3.ルシズム形のみが使用される語彙の三種類に分けている。さらに2については各種の辞書を参照して、当時の言語でのスラヴァニズム形の語の有無と文体的帰属を調査し、中世ロシア語で対応のルシズム形を持たないものと、本文献では出現しないが、対応のルシズム形が存在するものを区別し、各々の語の意義的なずれも考慮しながら、きめ細かな分析を行っている。その結果この『モロゾヴァ物語』が、一貫したスラヴァニズム形の使用で特徴づけられていることを明らかにしている。

第3章では、このテキストの言語的特徴の一つでもある多様な分詞の用法のうち、中世ロシア語でも使用頻度の少ない、文の主体的動作を表すための能動分詞の使用と二重対格における分詞の体系的な使用例を抽出し、この文献の古風化の重要な要因と判断している。一方中世ロシア語文献で広く用いられ、同時にその作品の言語を特徴づける独立与格による分詞構文の分析も行われ、これが非従属節として用いられた場合には、周囲とは異なる文体が挿入されるため、物語の流れの転換点で用いられる傾向があることを示した。

第4章では現代ロシア語と大きく異なる、古代ロシア語の過去時制（未完了過去、アオリスト、完了）の問題が扱われている。17世紀のロシア語では実際には、未完了過去、アオリスト、過去完了の形態は死滅していたが、『モロゾヴァ物語』ではこれらの諸形態が体系的に使われている。本論文ではこれらの諸形態を分析する際に、時制形態を単に言語学の問題だけではなく、典礼書の改訂に端を発した教条的論争（時間的な限定をせずに過去の一時点を述べるアオリストは永遠＝神を、行為の限界をしめす完了は過去＝人間を示す）としてとらえた先行研究も考慮して研究を進めている。結果としては先行研究の図式は、本文献では見られないことを確認した。ここでは、文法的にアオリストと未完了形では単数2・3人称が同形のため、それを避けて2人称単数では完了形、それ以外はアオリスト・未完了過去という、14世紀に確立した形態論的基準に基づく、高尚な文体の規範が使われていることを計量的に示し、それらの動詞形態の用法を精緻に分析している。

第5章ではスラヴ語の数体系に本来備わっていたが、比較的早く消失した両数を扱っている。17世紀の世俗的な文献での使用は、ごく制限された範囲のものであったが、『モロゾヴァ物語』ではこの形も、名詞と動詞で比較的多く使用されている。使用基準の調査の結果、両数形は完全な形で保たれてはいないが、その使用は『モロゾヴァ物語』の言語を伝統的な聖者伝の規範に沿った古風なものにしていると共に、その使用には言語的なもの以外の要素も加わり、両数の形態が、モロゾヴァ夫人を含む古儀式派教徒の肯定的人物を描く場合に限定され、ニコン派の否定的人物には使われていない現象であることを解明した。

これまでの章では主に動詞と名詞について、形態論・統辞論からの検討がなされたが、第6章は語彙的側面からの研究で、宗教的なテーマ（十字架の印、信仰と教義、教会典礼およびそこで用いられるもの、信仰生活、神および悪魔、登場人物の特徴づけ）に関わる語彙が、古儀式派とニコン派の論争の中で、両派によってどのように使い分けられているかを詳細に検討している。

結文では、第2章～第6章における様々な観点からの言語分析が総括され、『モロゾヴァ物語』の言語が全体的に古風な特徴を持つという結論が導き出され、また本論文ではカバーしきれなかった現象の、今後の研究の展望が述べられている。

補遺1では『モロゾヴァ物語』の日本語訳と註が示されているが、この訳は、テキストに忠実な逐語訳で丸山氏のテキスト理解の正確さを示すと共に、現代ロシア語訳も外国語訳もない現在での本邦初訳という意味でも、重要性を持つものである。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 浦 井 康 男
副 査 教 授 栗 生 澤 猛 夫
副 査 教 授 津 曲 敏 郎
副 査 助 教 授 望 月 恒 子
副 査 教 授 栗 原 成 郎 (創 価 大 学)

学 位 論 文 題 名

17世紀ロシア古儀式派文献

『貴族夫人モロゾヴァの物語』の言語の研究

本審査委員会は、4回にわたる審議と口頭試問等を通じて、以下の点を確認した。

本論文は、最も信頼し得る校訂テキストにも言語学的校註が施されていない現状において、『貴族夫人モロゾヴァの物語』の言語の体系的研究に挑んだ意欲的な論文である。古儀式派文献は、一種のカオスの状態を呈していた17世紀ロシアの言語的特徴の一側面を示す興味深い資料であるが、従来はアヴァクムの著作数点にのみ学問的関心が向けられてきた観がある。本論文は、古儀式派文献の中でも『長司祭アヴァクム自伝』と並んで文学的価値の高い『貴族夫人モロゾヴァの物語』を、マズーニンの校訂本に依拠してきわめて精緻に読み込み、綿密な言語分析を行っている。本論文は『モロゾヴァ物語』に関する世界で初めての本格的研究であり、その研究成果がスラヴ文献学の分野で持つ意義は大きいと思われる。

第1章では『モロゾヴァ物語』の歴史的・文献学的背景が簡潔にまとめられており、独立した古儀式派文献研究史概観としても読める充実した内容を備えている。中でもキリロスとメトディオスに始まるスラヴとビザンチンの長く複雑な歴史的・文化史的関係の中で、スラヴ・ロシアの典礼書の改訂が常にアクチュアルな言語学的背景を含んでいたという指摘は興味深いものであり、論文筆者が『モロゾヴァ物語』に関する文献の博搜・渉獵を経てロシア語史のみならず文化史的にも広い視野を得たことがうかがえる。

音的側面からスラヴァニズムとルシズムを扱った第2章では、徹底的と言ってよい程のスラヴァニズムが作品の言語を特徴づけていることが明らかにされる。章題の不適さが瑕瑾となっているが、各種辞書を参照して様々な語彙のスラヴァニズム形とルシズム形の用法を分析し、時代による意味のずれも考慮しながら当時における文体的特徴を規定するき

め細かな作業を行っている点が注目される。

難解なテキストを真摯に読み解き、それに基づいて豊富な用例を抽出し、文献学的手法で精緻な言語分析を行う姿勢は、第3章以下にも一貫している。第3章では、文の主体的動作を表すための能動分詞の使用、二重対格における分詞、独立与格による分詞構文の用例を分析して、こうした分詞の多機能性が、作品の言語構造を複雑にするとともに文体を擬古的にしていると結論づけている。第4章で取り上げられた過去時制の未完了過去・アオリストも、ロシア教会スラヴ語を志向する文献に特徴的な古風な文法形態であり、このテキストの言語の古風さを指摘する筆者の主張は、計量的分析によって十分に裏づけられている。

両数を取り上げた第5章では、『モロゾヴァ物語』の作者が古儀式派とニコン派の闘いを鮮明に描き出すために、両数形と複数形を意識的に使い分けていると結論している。アヴァクムが過去時制における未完了過去・アオリストと完了の形態を効果的に使い分けたとする指摘は先行研究に見られるところであるが、本論文では両数形が同様の役割を担っていることが示された。古風な両数形と口語的な複数形が文体的効果を目的として意識的に使い分けられているという指摘は、筆者の斬新な観点を示している。この章の基盤となった学会報告は1996年度日本ロシア文学会「学会報告奨励賞」を受賞しており、筆者の見解は学界においてすでに一定の評価を得ていると言える。

第6章では、古儀式派とニコン派の闘争を描く場面で用いられている語彙の差異および用法の特性について述べられている。語彙の研究は、本来体系的な扱いが難しい領域であり、本論文の記述も用例の列挙になりがちではあるが、筆者の独創性が最もよく発揮された章として評価できる。

また補遺としてつけられた日本語訳は、テキストに忠実な逐語訳であり、論文筆者のテキスト理解の正確さを示すと共に、現代ロシア語訳も外国語訳もない現時点での本邦初訳という意味でも、重要性を持つ。

ただし、少ないながらも本論文に問題点がないわけではない。委員会では、ロシア史に関する記述や日本語訳についてドキュメンテーションの不備が見られる、構文解釈に曖昧さの残る部分が数箇所ある、パラダイムに現れる古形と革新形の使い分けなど幾つかの要素の分析が不足している、言語の古風さを作者の意図として解釈する視点の掘り下げが足りない等の指摘がなされた。これらは論文筆者の今後の課題となろう。しかし、本論文が他に先駆けて17世紀古儀式派文献の中でも重要かつ難解なテキストの言語分析を試みたことは、高く評価しなければならない。本論文で行われた分析とその結論は妥当なものであり、『貴族夫人モロゾヴァの物語』の言語的特徴は本論文をもって十分に明確になったという点で、審査委員の意見は一致した。

本審査委員会では以上を総合的に評価して、丸山由紀子氏の論文は課程博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであるとの結論に達した。